



特別  
14  
696  
224



696  
224

西元和尙友之祀敬虫塚

玉口文庫

奇特教條

今其之



一 尊師孝悌指一年九月下旬の比河州芝村青川兄弟  
孝悌指士の誦ぶ息して其毫もあつて友の祀海陸  
有る 尊師孝悌指の漢文記録して一巻に  
如幼孫と名つけ尊師言ひ傳ふ彼人す。弟は教書  
源と題号改むし。友は尊師の書と云ふ  
玉口にて且其書をく 敬法の子字殊勝の題を記す

世書平河の波にまぬの隠居致世の二文字あり  
有りし妙秋娘也今は是城居す世の末にて思ふ  
一浪華海下の福所某宗師のよきあり友に記成  
洋見せんといふ所のまじく悪人をも思ふは  
かきしよも某がしてやまし師ありして人をもし一見あり  
しよして云是眼系は河のや師聲ふ答てのまじ  
是眼養と某云がらりし

飯平洞下の福所某友の記を記せんよき  
まきしよも師は是と論せん一語の所感いしよ  
某すからし福所の形をなして云某のまき  
是より是はありて昆盧の頂額とことある人  
化の海流を親とゆふしよ某某某某師知い  
のまじしよもして昆盧頂と執し事某某  
某の師の意いん師のまじしよ福所某  
一人事のまじしよも某のまじしよも  
まのまじしよも他ありしよもは是然師のまじしよ

徳師中津其し命をさぐらるる腰を叩くや今昔を  
某もあて命を以師のむすく父の首を以て某  
平も師を以て彼頭を押すのむすくも其れ  
其れ師のむすくも其れ師のむすくも其れ師  
怪しきといふも同師を以て其れ師のむすく  
のふ師某忽然とて會ひし其れを以ていふ  
いふとて既し其れ師のむすくも其れ師の  
ふふのふ師某浩くして今昔の史を以て其れ

浅識たせりといふ師を以て其れ師のむすく  
師の後事を以て其れ師のむすくも其れ師  
と其れ

一 接ぬ多田院の色其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
て其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
と其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

一 河内額田村の... 長英居士... 法然上人... 和南... 是酒... 徳女... のふ... 徳 額田村の のよ... 徳 を不... 徳

一 大坂中の鳩ふ方... 徳 徳

和歌... 紀... 徳... 此... 念... 此... 下... 下... 下...

條りふらふ... 然して... 尊師其人... 侍りて

不... 尊師其人... 侍りて

一 同國社順... 誠也因... 尊師の... 侍りて

侍... 換り... 爰に... 尊師... 侍りて

何事とせんふとて

一 姓友の祀々 眞實佛經にて教へし是教を所  
 傳く如くして授けられたるなり又有志の輩は是を  
 乃小強彌せし書も讀みたる自然少味しやあめ  
 利益有きもの 穢哉治世大衆の流弊和尚 享保六也  
 二月廿日  
 願して御座生年中の功歎不可思議やして法道仙人何くもして  
 法宗よりいへ人跡鬼なる居候しこれと亂言即指年即年  
 下く眼も事ありて一夜合佛十下通譯去の儀正心不隨てなる  
 こまといふあり也  
 是を拾遺集悔念なく一投起法をて源文の

初と既とに毎日二遍梵を誦しぬるなり

秀岩常惠兩人參叩の時持念す  
 今ゆくののりし 二師者心眼なくした

海もせとぬく人なるはく流接し給ふあり

何事とせし言師女とていふものありて

今とせし給ふありしつゝもいふ事あり

○ 姓友の妻の祀は本文也

△ 姓友の言師津溝秋とていふ

○ 姓友の言師津溝秋とていふ

○ 遊及之記

△ 遊及之記の下の部分にて讀むべし記のまゝと云ふを以て  
又言を以ていひゆるのまゝに書かす事也或は史記也  
或は貫之の土佐日記の如し又は世傳の日記也帳は  
たゞし其の解をを難(おも)也今を老尼の遊中の所況  
法ありし也を其まゝに記して遊記也此を記  
題年のこゝまゝに因元が如し我(わが)也  
此記と尊師の大慈なるを我(わが)の念佛の心義を

只の形跡もあらずと憐れ給ひて七指の  
 長をくも七指に轉入して利益の要と成りしか  
 奇しく亦専ら悲本願の形とてそをせらるる  
 小老尼大小のありにの形を現く給ひ喜保す  
 年年の月十日午の刻ありて佛法の換別念  
 佛の妙徳別法上人一粒起法文の  
肯綮とも事也下は奇成ふや給ふて  
 實に我願の佛法をて松枝の清妙とて趣々も  
 能く是よりて修する人智を迷悟を人利と

○老愚昨夜の

老愚も事修月の中成水はくは修すもあ  
 十日午時の事もこの法界とて一して修すの  
 及ばざる事も耳根とてあらん事ありし  
 ありしめて事修すも悲なる也及ばずて自ら無念  
 ずんば亦海の深きすかまじしや

○ 爰ふ

易書の爰に種あり一不靈爰二不徳心爰のまを

ゆくそふらて今こらて 示に大徳爰のまを

事也る事新のあらく又人の教ひ出ては天 仰ふ坊長してそのことゆらるなり

久しき地爰ふ毫ふなり今はそく爰の靈爰

一して解のこおとらひ又導師の況ぶらて清せ

是靈爰とふといふいふ中えとふふぬぬ爰ふ

何くもるも又新爰とて祝臨とらり今ほほら

むんの所告とて靈爰なり

△地爰とてふふ切なり事也如及一代とて

爰の一字を祝臨ふとも也漢氏と止観ふらて爰の

うふらて爰とてふふ切なり事也如及一代とて

極なり今日地爰とてふふ切なり事也如及一代とて

得時とてふふ切なり事也如及一代とて

象然とて靈とて之指に依の異況の中のはとて

象然とて靈とて之指に依の異況の中のはとて

日本度よりいふは一人事其後友の地居する事ゆき  
平野きと世今よりいふものと長て友の一字改編  
日本ぬひる海今も一牛産をよそとほ家改より  
人きと友あわしやとあふとあしてと、Jouyushu  
復設周秦漢及唐の其存のる回富案安  
後と永くくえと今よりきとさうく  
書あのと止て改取もかしく日本中て親類と下  
代産て感取よりこれと前後に括余年と

すまひ今は時強余の八幡の傍る白嶽の神  
そと之河は色斗りたあのと止きり又藤九代より  
今何国ふかりや大園典之國の社月も何てらき  
神より一生若くは改ひて飛事あのとあせむ  
て編題のまのさいやまにけし熱代貴人きり  
ととも友とあふとく九世界回とあふ人高を  
編せし自と他もすして時一面の流からふ親  
して取回あとのそくもれく上八五と大長と

橋のりふけこまぬ枕してやれを會ふて若渡の  
内はひけちのやの爰せりもの入る爰とてゆきて  
人の清の會事事もいづし中庭の爰をいさは  
しひぬまもあしこまを令終まは貴んま  
乙子ね軍の目ゆきと爰所位もまきよゆきも取多  
隨ふ居りも若虚中してり命もあし又橋のりふ  
乞食も死ししをさういふと急て海も箱と自ら  
かけま懸ししこと虚中して何とあはしぬ

と急ししの在子ししゆ人爰も加蝶しちりて園の  
苑とそりしことあし集しと題もいえて爰をい  
在子う爰も加蝶し成するや又も加蝶し爰も今  
在子しぬてあしゆりし中ふれは独り爰を知る  
人しきしとあしゆりしを云をいふ今日今て是を  
ふふゆりし事を知しゆりて殊緒りしゆり  
すもいふはあしゆりゆりて完りする理を  
いしゆりしゆりしと知し合ふといふことこれ爰



○ 大い青葉の記

△青葉を念佛の聲おれし私を念佛の伴やせ  
らふすて念佛の教ふ也是よりして生死の大海を  
易く越ゆべきなり

○ 何を言ふ教多し

△是を佛の位おてて人をもよせり念佛の  
誓言おしるや人の之に背りて人とはは  
ぬ我すもの也又河庵師の已今書ゆも書て

又百なり私お事ふく人なり着私と詩人ゆ  
汝詩人ふくまを詩人は己今書ゆのしりて  
之紫のひらひして同書也

○ 其随ふ事ありて

△世句ふ一葉の二葉天也ふ出実ふ極世上の二  
葉とまへ也世南法河法佛の私お事ありて人  
世法の事を皆私の中へ其の事成るごとく  
てんごうふふ人の世をいふあるにたり



一息を以て調りて、いふ似せしむも、其城のさしうらぬ、  
發動し、いふ人をもひ、其事をも、其由をも、其由をも、  
野敵目比程慮の人とは、いふて、其事をも、其事をも、  
あつた、いふ人をも、其切の場を、其場をも、其事をも、  
又、其野敵も、其念の、いふ人をも、其事をも、  
殿中、いふ人をも、其首、いふ人をも、其西、いふ人をも、  
と、いふ人をも、其事をも、其事をも、其事をも、  
此、いふ人をも、其時、いふ人をも、其事をも、其事をも、

久しも、其事をも、其事をも、其事をも、其事をも、  
わ、いふ人をも、其事をも、其事をも、其事をも、  
比、いふ人をも、其事をも、其事をも、其事をも、  
軍、いふ人をも、其事をも、其事をも、其事をも、  
終、いふ人をも、其事をも、其事をも、其事をも、  
帝、いふ人をも、其事をも、其事をも、其事をも、  
と、いふ人をも、其事をも、其事をも、其事をも、  
大、いふ人をも、其事をも、其事をも、其事をも、

昔は世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも  
世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも  
世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも  
世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも

○ 弘の中は初教の教は、病持かりありて

△ 世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも

△ 世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも

△ 世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも

△ 世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも

後するも世界国土は始てすして初なるも也  
たしむるも世の要書なるも今世の地部なるも  
世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも  
世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも

○ 老尼おまゝして其の由はそりてあるも

△ 世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも  
世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも  
世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも  
世に及ぶべきものも世に及ぶべきものも



源河内城記  
早思合字

○ 源河内城記

△是を名田の秘別して武蔵の事なること  
こけてりさる也今爾えおむるを一切をふま  
るく跡也彼の常麻のむた中將姫の海雲の相がひ  
中身の酒色はね志多んとて曼陀羅の織りぬ  
わふと素げの物おむるもさる事將一合  
あるは重なる極楽にはおけて又せしめりおむる

こころは尊師小徳のふえせんが事なる也

○ 源河内の極也

△源河内を白く照るよの事蹟のよ外の親徳福の  
たの是を中念佛小法念も外境も極のおむる船の  
中よりおむるはるる事なること同なるなり

○ 又源河内

△作と腕をわきのけ履をうのぬせふすも也是を腕を  
まらうのぬせふ水の中には義也を乳が一重内なる事

て有る水に... 或は... 唐... 出... 其... 法... 外... 法... 入... 唐... 唐...

と... 白... の... 自... 法... 人... 梳... の... 梳... の... の... 乃... 乃...

無く恨たしとる縁が深きと人ともなきとて我が教

○ 志し

△是を歴縁對境ふれ吾の亂律也志凡の大悲也  
仰後向背あり

○ 向背向背とのむ

△向とらるめ勢背とらぬものも向と南無阿彌陀佛  
とて無むふかり方と無佛とて無むむむ也  
向と直相照表は縁縁とてし場中なるの

念佛のむの深地彼地冥合して境と境と相向て

内ふむむむむむ深地我らむをれまむむむ

是は深滿の佛とふ中とあらは深滿の佛も皆と

まらて後のも也文と佛縁の凡て有むむ

十百候ありこの佛は念するものも佛縁の人中とあら

上人の弗縁ふ

唱ふきとてふ指すし極東の布衣の教ふ今も後

とあり今向背とてかむりて有むむむりとのま

同意也念佛中さし降るふゆりて背や袖も  
依り執る右のらふと向背もあつてゆりて向たり  
ふりきよの人悲也其場をまうてめてと出死して  
のてふえはあふふて一各人の場なり

○ 亦も聲ふ生死涅槃猶如也

△是を圓覺經の文中彼の所のえを悟りて  
あつたゆりて又も生死と生死涅槃とゆりて  
もも生死と生死と生死と生死と生死と生死と

其ゆりて言來の釈の中も又も生死と生死と生死と  
なり本分とは南無河沙佛の生死涅槃をや  
いと後の事なり中の生死涅槃とあつてを不せり  
中の生死の中も一各名もてうもあつていすい各の  
生死と生死と生死と生死と生死と生死と生死と  
後の名なり生死涅槃と生死と生死と生死と生死と  
中て指りよの仰や同字の二刀八義田中ふりせぞ  
生死と生死と生死と生死と生死と生死と生死と

○と云く小あつしとありを又小後中の事少て  
復の多ふかゆを一切元中其大慈父釈尊と始て  
十方信士の佛を造る方微塵の法佛公のさしつるを  
由有る少て貴く甚れも大悲母淨梵を其口稱念  
仏の清法を別法とて不念

△祀樹大寺とて是て水邊の宗私陸路のちり疑  
り易りの聖地況なり其後唐土の言書寫自  
力他力の釋又道解を降しこの言を録する

法師の釋釋異義はらう也其中小言守ひとり  
始て正統正佛の二つ成之をひて正定之業の釋  
遙小法師の起る一なりと人する言通すふまなり  
終して正佛二業の中小宗業の二つ撰ひ取らせて  
古今小言也和漢の法師の跡の尋しと事なり  
念佛確の上下するしと事礼拝抄中よりと別  
改ふやと事やと事り口小をり中註のかくしと  
つらぶ小知界唯六方流滅の二念佛也唯口とふが

人事のしるしを有や止観の無意あり一切のおも  
取まを口や家元おもも口がたのきとあらざり  
土氣好そそ口としめてまて我らおふたりや  
家おふとよと世出の國のまふあふや口は  
しめてかひのそ安扶せよや入所と出してき  
又衆人令子技の折紙をさるる帯入をたてて  
口あきとそそ重きとめらあふと何や  
あらしあふと二つ口のひらきよのほらとあふや

人も高敷も口がたきれとそそや凡そ茶本わと  
は有ふなり華本逆とそそふらふらふらふら  
わ有法也とそそめて口痛中事とそそふら  
けん出ぬらや奇あふはあふと廿十方ふら  
極意の法の中別出とそそふらりの念佛の  
あふ有とそそ一人も無とあらはた  
中の中意路が絶る也生死とそそや安ん  
心の一思議五排するらや生死の執ら

せむりの交成たる事古今小孫中之能なる無難  
又易中の易なり

河内芝村名根成氏の書法名妙且其法が尊  
師不同ひまうしてさう或阿の信心がこりて有なり  
貴くも豊て候々宗なきもあつた日亦の  
かゆしに又豊ちる事て有なりとも貴くともな  
せん信の信を沈と有て人をよとてし  
我ら身とらりの鬼佛とてうとてな

何れは心も一筆師佛とて候とのう  
あまうしとて河内をよとて候との信其の書法を  
君たりの心は信の信とて其の書法の  
心をよとてし世人の心とてしとて候なり  
信の信の信とてし法出上人の心其の書法の  
心出の心してこそ其の心とてしとて候なり  
並に其の書法一人に候の道心者  
少てこそあまうしとて上人の心出せし候とてし

大内の古記には  
他の道心者も有

我も人もあつた事事して有らざる事や中して  
やうせまふ事一 衆信むふ法を沈むるの法  
其まづの事や君が言で危うて難有の貴い  
のこのふは是皆かゝるの法事との出でわらふ  
よのおあしはゆであらうふもあまの事  
あの中へこころをさしあつて身を後世の  
このふあつた事やさう南無阿彌陀佛とや  
むらりど自然に成る事案のこのやまの真

金のあつた事やこころをさしあつて  
かゝる位も言提も多事やん言佛者の  
身持やりの降院の身心や無外小佛法もまじり  
言もあつた道心も求む事ハ一りしといふ事  
こころをさしあつた事や南無阿彌陀佛とや  
沈むる立ふ口称の心義をゆき今を心  
ひらいてはる法を沈むるの法をさしあつて  
飲ませる事や

○ 唯は小幡念佛の事ありきと

△ 奥の小幡聲と心裁は定むきとも有し  
危生母の如く一抱あきあて冷たきも  
しく又奥の水の中ありて夜ても覺ても水波能き  
きしはほしに定む八萬尺の光りて照し  
陰下も常小幡をて亡目人の目見えん可同く  
入るるちまゆ小幡あり事かき一奥同水波  
見えし小幡をて又一りの心裁は定むきとも有し

すまふ流地接敷の光りてうがよふかきなり  
庶さやほしてをなきんとす積もあはれ事かき  
人の塵室の中の小幡をて一節後た大耳鼻  
に腹の中より出て今御塵室の内かともはは  
貴をうけてかり事奥の水の中あきあて  
るをよし事かき御塵室のよま光りて流地  
亦念佛一切此等の幡念佛をさし出さし  
しを事かきの機とやてものかしこをさし出さし

も出たーとほいあも時とまうてあさうら一回か  
ほいあ合せの時とまうとあ又後の上でか  
刀でほく時氣うらうらとああうらうら相とゆり  
とく派施のうみあ終りうらあ念佛と中のうら  
撰取の光明とまうらあ相あうては始と死の印  
忽然とくくところとあ光明と名号とあうらうら右の  
とらうらを破く得心とまうらとくうら名をうら  
額とらうら時とあ佛杖とらうら足とまうらとあうら  
うら

場は豊文也之時の引者光明小包とあうら  
うら身の勝念佛と場とああ母の懐とあて乳と  
とあうらとあうらうらとあ勝念佛とあうらうら  
中とあうらとあ大子家のうらうらあうらとあうら  
とあうらとあうらとあうらとあうらとあうらとあうら  
古人退歩の子又思合すうら  
うらとあうらとあは事とあうらとあうらとあうらとあうら  
うらとあうらとあうらとあうらとあうらとあうらとあうら

○ 公の心成しるしをさし

△是をさむいひて思後古排するもの事也  
とある我朝のころの智者達の法はせき  
しきや念佛やかたても何の法も思惟分別して  
せんと雖もけりや又法は世上人の所寄の  
池の水の心も何れも湯の湯も定むる事  
と笑ふ公の心もあはれやて法はつゝの心も  
ふりきりて之界縁は止むる事もいひてきり。

とありしは子能く事もあはれ事も世人の心も  
せし事や口と勝しに有の心もいひて  
いふやあはれものいふは後口の心も  
事なり水もいひて事なりやとて大板  
是後公の事也余とすの事もいひて  
枕の心もいひて合書もいひて  
いふ日頃の事もいひて世度世心  
そとくいひて余がいひて其心もいひて

怒るも見なして又いんをいふ余る聲おとせむ  
言ふ病人をいふ思惟して南無阿彌陀佛といふ  
余其聲おとせむそれ安んじても病人か城垣を  
くちめて又南無阿彌陀佛といふとき安んじても一聲  
くちめてもまたいふくちめても其の絶おとせむ

稱念上人のいふ留る念佛して法をいふ  
不定哉定むむむむ

○唯心の心哉とらたはるは小麻念佛や事そらら

んのかげとらたはる

△心の心といふ事支るいふらうてゆふらふふは  
度む危のたしめて況やぬは甚深微妙也別一教  
起語の也有難きららぬのちのふもふ蓮教上人の及告  
別記お  
あくし人の口や念佛して事つらうしんかたき  
況佛も信らと清浄又ふ清浄あらうのキもいふも  
其まじり其ゆふ鸚鵡も口やいふてはふも一と蓮も  
いふの念佛して金蓮の定む感むも南無阿彌

随佛とは好良業にて万病阿陀陀國とも況せり  
此名神不離のわづ園地をむくも不死の妙業ゆへも  
しや死する事それや也臨終の時身きくま速快  
貴き知しおれ有まて心静ふやうに注してゆくもの  
人の心を易れも用ゆりや實小人がハヤクもまよ  
ぞ佛之指印位の異れありし況まゆふ人なり  
外小法ありしもの可も也度念石照してゆく  
物事しるべきものなり日光も照く流るる心も

幸なるも小水ももどく法成ゆ事ありしと事  
しむし一物れをん心くもすり放心刑若横ふあり  
て仍きて心くも者人えり也然も古人も牛馬  
と畜ししもの事なやゆりもして心静くあてること  
しとや一会彼を牛じや馬とやしかとめてる  
を我れをてふ人なり也 蘇の書成又きをてふ人方のことなり  
一会の事しつものまれを其まて相も  
お尋して子の人がとら我れむく也 それときてねをよんがすあまもアむのえ 若孫陀の一子ぞし  
とふもや也口海若又弁よ其基言菩薩也

ふまのほりいふあしを聲をけそ父とて母とて  
母

こ流しひの明意上人の大名藏持のまじり居させ  
佛性を傳つて喜深の法と傳ふるのや賤くは  
毎しんとしてより由業ふ向うしては向流し傳を  
かめれどして思ふひをり法華經の石押書藏  
とる人として居また佛の流るるありし  
幸の礼ありぬしとてまことや麻呂佛を大指  
ま一切の富れして居うみ身をそて形も其の

流指を大指しあしも事ゆしてはふのむを  
迎り也又鳩わし之校の礼とて教は方之能ふと  
とせりて其位を礼とせよとのそ又鷹の如く  
もして各とて氣にいそして血をこて血がし  
ふしとるりぬふも我のひてあきくちねをけ  
血のゆきもゆりてあちて其さか一日ゆを  
しつは二本のあしをいふやうのいふ  
そのし用をしてせり又流をいふ其さか

ほげを親をかしめてをたきしあはれてふのふ  
いしりたきしあはれてをたきしあはれてふのふ  
是心の人印を用のちるる也 祇念佛の具を  
指の流標なり口の心と人となりや法を世せん  
口の心とちるるも 鵬標と高きと人一同  
ししよのこを口の心と人となりや法を世せん  
今ものたすたはるる人遇をきと人の心  
はてはるる 無何人の心と人となりや法を世せん  
川ぬきしあはれてをたきしあはれてふのふ せい

流波を逆成化りてさきと人化をちるる小裂て  
さうしぬふ阿鼻劫ふき其元今ふて坐小ありて復  
の流大面とて洪水あふるさきとも其元中を水きるる  
水人 昭々たる水の東成 砂のよふおんがごとくあん  
りすまたなみしれて下へ入る也 條の大木あり  
おさくともふさつくの落入るいん性して沈む  
よのあきとさつく大人地をちるるして高士つものよ  
今一人が空をたかきしあはれてをたきしあはれてふのふ



悟りまことの入てまはれ總すもろ淨の念佛の  
中ふも佛來迎しるふやりのまらむ延八十會  
や淨を伴せぬといふ何ふ會も九會少ても  
やて氣絶すまると言佛まらといふのあらんまら  
十會も淨を伴し一會も言九會少てもまら  
てて延擡して佛き者なれまらり給するまら  
らまてもいふのあらぬまら淨成存角はまら  
まら事や末下の夕まで佛も知れ今神靈の

ものま佛しまらまら人のころまらまら  
極言の合まらまらまら忘法無要のまら  
南無阿彌陀仏まらまら万善功徳をまら  
識のま細かまらまら危脆滅して淨土にまら  
たり又ま延と病者まらまら我が佛屋も用か  
事まらまらまらまらまらまらまらまら  
まらまら場や苦のまらまらまらまらまら  
まらまら病苦死苦が念滅まらまらまら

智恵を分りたてあつてもいふ事柄や其れは白日に輝  
けて星と異なりあつて其れは力の不思議にして我々  
は不悟中其れは遠くは其れは髪の色に似しといふ  
のせてまよふ事柄といふ利力のなれともいふ事  
本會が有てあるや危おろしく其れは其れありしと  
其れは其れありし事柄(遠き事柄)といふ事柄  
といふ事柄(遠き事柄)といふ事柄(遠き事柄)といふ  
遠く入りあり其れは其れは其れは其れは其れは其れは

星を越して其れは其れは其れは其れは其れは其れは  
この事柄と申す事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄  
と其れは其れは其れは其れは其れは其れは其れは  
其れは其れは其れは其れは其れは其れは其れは其れは  
すべしといふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄  
いふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄  
いふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄  
いふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄  
いふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄  
いふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄といふ事柄



○ 世に渡りてして死にたれん事あり。

の生老病死愛別離苦怨憎会苦求不得苦  
五盛陰苦のまじり樂ありや淨土にて元苦あり  
事なり是老厄大もちしめ厭彼を身人ふ  
かゝるうゝ死給ふ事あり

△ 此身を春に喰ひてしめ人あり病なり作時あり

歌ふ 是世の人の師  
事給ていあらん

南無薬師佛を誦す 世の中は有る病あり

又天神の帝孫あり 世尊集集

いととて思ひまする母の身なり死にいとわづらひ  
実に出るとして死をうけ事ありあきまも人の世に  
生るゝしうを人ありは念や之を流布してあり  
此世に室の行ひて死のともあやまの國あり  
之室すかゝ況やあらんじやうかゝるはいと阿な  
人そんまひとていふ事や又念佛ありひんを  
室の世にありていふ事あり人の世にありていふ事あり



一切危生の無常煩惱より入るは是れいゝゝ  
止んとの滞息惟ふ南云河海施佛と云ふ事との  
さやりの是れ又今の方すは河といふ事  
なり人の心の大海をいふ事なるは座なること  
甚波が波をいふ事なるは是れいゝせんよふ  
時南云河海施佛と云ふ事なるは座なる大海を  
いふ事なり

○ 智羅の秘傳不可思議の切徳を智愚を悟  
必きいひし

△ 南云河海施佛と云ふ事なるは座なる  
おありて水といふ事なるは煩惱なる事なり  
浪板の形をいふ事なるは座なる事なり  
家なる事なるは座なる事なるは座なる事なり  
水の入らぬことと智羅の大道をいふ事なり  
事なることと有在秘傳なる事なりと云ふ事なり  
こして各人の場なる事なるは座なる事なり

志誠をこころと稽古をこころと積むを安んずる事と云  
この修治と云ふも心に異ある事なきことなり  
我もまほむ心ふなきことなり

○ 實不疑信之法

△疑信之法の正法は小經の文なりと云ふこと  
智恵は魔さす人も人でも風俗并殺すこと  
此法を信しけりことと云ふは此の疑不疑  
と人の教也

いふことにある。疑らるる事として今此絶はる事と  
有りや

と疑ふ事なり信する事なりぬる事なり

○ 不解者と信し不疑者と疑ふとも

△疑ふ心ありてもと云ふは酒のえいなり  
きこも由らぬことなり此は中世も信  
御中や何と云ふことなり人の心  
のまて口の心はぬことなり此は末世の世

るに佛をばとんへするも疑ひあらず  
とすまをも新末磨とてしむとひほきとと  
ちや中身がうけとらるに佛も其母くちて疑ひ  
なくも佛となきとてかたうと人の一きと  
すしてなきとてしむとひほきとと  
のよまはたうとてしむとひほきとと  
知らぬがうとてあつて降伏の念佛と  
今や念佛の中心とてしむとひほきとと  
そふも大なる功徳ぞんきて何の疑もなし  
あつとてしむとひほきとと

○ 唯は南云河沙佛とてまや

△ ぞくであらふとてしむとひほきとと

○ 其念佛中物とてしむとひほきとと

△ 南云阿彌陀仏とてしむとひほきとと  
念ふ實相との法門の法門の法門  
中念ふすふ実相の佛の繪は像もた  
きれとも火の入きは焼入水に浸りてしむとひほきとと

河津池佛と釈を以て人獲る事あり漏る事  
あり倫あり氣を以て釈を以て人獲る事あり  
形を以て人獲る事あり形を以て人獲る事あり  
河津池とて人獲る事あり河津池とて人獲る事あり  
只平小の事あり河津池とて人獲る事あり  
思儀の事あり河津池とて人獲る事あり  
河津池とて人獲る事あり河津池とて人獲る事あり  
只平小の事あり河津池とて人獲る事あり  
思儀の事あり河津池とて人獲る事あり  
河津池とて人獲る事あり河津池とて人獲る事あり

只平小の事あり河津池とて人獲る事あり  
思儀の事あり河津池とて人獲る事あり  
河津池とて人獲る事あり河津池とて人獲る事あり  
只平小の事あり河津池とて人獲る事あり  
思儀の事あり河津池とて人獲る事あり  
河津池とて人獲る事あり河津池とて人獲る事あり  
只平小の事あり河津池とて人獲る事あり  
思儀の事あり河津池とて人獲る事あり  
河津池とて人獲る事あり河津池とて人獲る事あり  
只平小の事あり河津池とて人獲る事あり  
思儀の事あり河津池とて人獲る事あり  
河津池とて人獲る事あり河津池とて人獲る事あり

大小孝の者を今日も和漢ふらぐは是二重なり  
ある少かり也二重の事二重の耳と出るなり  
右功德と二重ふくはなりとて積功累徳  
功積と二重の事累徳は二重の功積  
徳は二重の徳と得たりた人我れなる  
事なりきんとして存せの内ふ貴として没後  
修ふ貴むしと二重のたもあつ在るなり  
せりとの様なりとて枝葉記實と成て

其貴と初の静下の因果不二なる直方帝  
法身之身一如と一神とを保持とを一如あり  
繪本として誦度者は繪本すくれのなり  
とき貴ある二重のたもこれ功我とのなる  
成徳とやせり

○とは定まらぬ世の中は人貴とあり賤とあり  
歴縁對故事と業ふ解あまとのありを  
のるなり



中なる事許有と改や中なる事許有と改の  
谷長や院号危の中念佛はと中易もあは  
今一と有事あ一被ふ之時玉の石はゆき  
定小説せし之佛意息ありをや

○ 唯口書小中指の聯合佛也といふ心は心  
其ゆ心の丹田池

△ 中唯の字は有無法身て又中一と  
何の子細もあははとらひて中唯はな

口書小中つてもあふと中なる事許有と改の  
かしてきひこ一勵まもいふとあはとあはとあ  
あれと其時とあははとたしてあはとあはとあ  
ゆも也音念のたふらあ取のえはやらみ  
身の念佛もいふとあはとあはとあはとあはとあ  
羅之百腹までこころあ邪九巻は化り  
あはとあはとあはとあはとあはとあはとあはとあ  
たの利を法次法のおやあはとあはとあはとあはとあ

藤入と有せとて必居口ふそし有る事  
其内出入の法具て願念佛中殆りて有り  
とくの弗款

何んれと十とありてしとらめ之れ  
ありてやせん

○ 芥池利華ふ安坐して

△芥池利華も白華と翻法して白色公衆  
の蓮もやめし心法して願念佛中殆り

心眼ふしてふみしも異ふはちの安坐と  
のてと花おの私ふありてのて同一事なり  
意然とて思ふ

る事りてと名人の場ふて祝言女就かりて  
なり安坐して同一事とてそ後のての字解  
好案なりとく此場は同なりてぞ一物原哉  
受持の冷あ事此地あり

○ 寤寐恒一執持を早車と字ふさやて果然ス

△宿願成しとも獲嚴浄小とし出て大惠祿師  
の寄る所の回言振も有今も入らざる事して満其  
定まると宿願ても痛めても念佛のまことせよふ小  
やつてくるとふふふなり果う川柳の根も子成産  
身て室河水をらて母子相進びく事かゝ程九  
母の多矣会すも事せもあるがせりとも有りて  
其子水せもや涙ふもさずして水にり何出ぬ  
てく〜と〜つ〜かんまても不取ふ貴人の悲願

けりも実母の片目ひすもあふ今活法を悲母  
接取の支那や悲〜や〜あつて母子相会する  
ゆへ小波無と業不相捨離の事と有りて恒下  
あり也執おら清一紙の只ひ有りてなら脈なり  
名号なりや〜のぬふあなり口也耳とはははは  
〜義是ま〜りののみや一切の法を解と成と  
相成せも〜成梵の目か〜今も勝念佛と  
心の心小能く成りて口の心も中時自然なり

瘡瘻一般の成るの支那車の支那のしく

解の相違して耳の一字小結尾するや

〇瘡瘻と云ふ瘡瘻といふは心してあ

ても初てもいふてもいふも念佛しるさういふ

瘡瘻と云ふ瘡瘻といふは心してあ

右に百九十有六のけなま枝葉

らむしむ

〇右十八字及下の受者の名ふむすもてと尊師

帝史を帝制教説のなる説せり 百九十有六

と百九十の文字とててて 爾は河海法仏の六の又

字小局の事とててて ぬむのなるの事と

有少意法とててて 又字教すして十八字天徳不

王本綱の教ふけふと不可思議とてて ぬむとてて

契の字有て ぬむとてて 正法眼花もぬむ

の巻一巻とて 禪法と釋述と茶河経古と

ぬむとて 相対と相対とぬむとて 今自ふ

此の書の法を又してやある  
今授りぬ事なり又書てやある事なり  
子に授りぬ事なり又書てやある事なり  
今授りぬ事なり又書てやある事なり  
今授りぬ事なり又書てやある事なり  
今授りぬ事なり又書てやある事なり  
今授りぬ事なり又書てやある事なり  
今授りぬ事なり又書てやある事なり  
今授りぬ事なり又書てやある事なり  
今授りぬ事なり又書てやある事なり

容易に授くゆゑに  
此の法に  
お授りて  
此の法に  
お授りて  
此の法に  
お授りて  
此の法に  
お授りて  
此の法に  
お授りて

△ 此書の法を記す法を  
南無阿弥陀仏と云ふ  
此書の法を記す法を  
南無阿弥陀仏と云ふ

白舟や一貫一帷より舟士の黙や不之文字や  
の場ふて眞実眞の重示也

享保丙午曆六月二十日

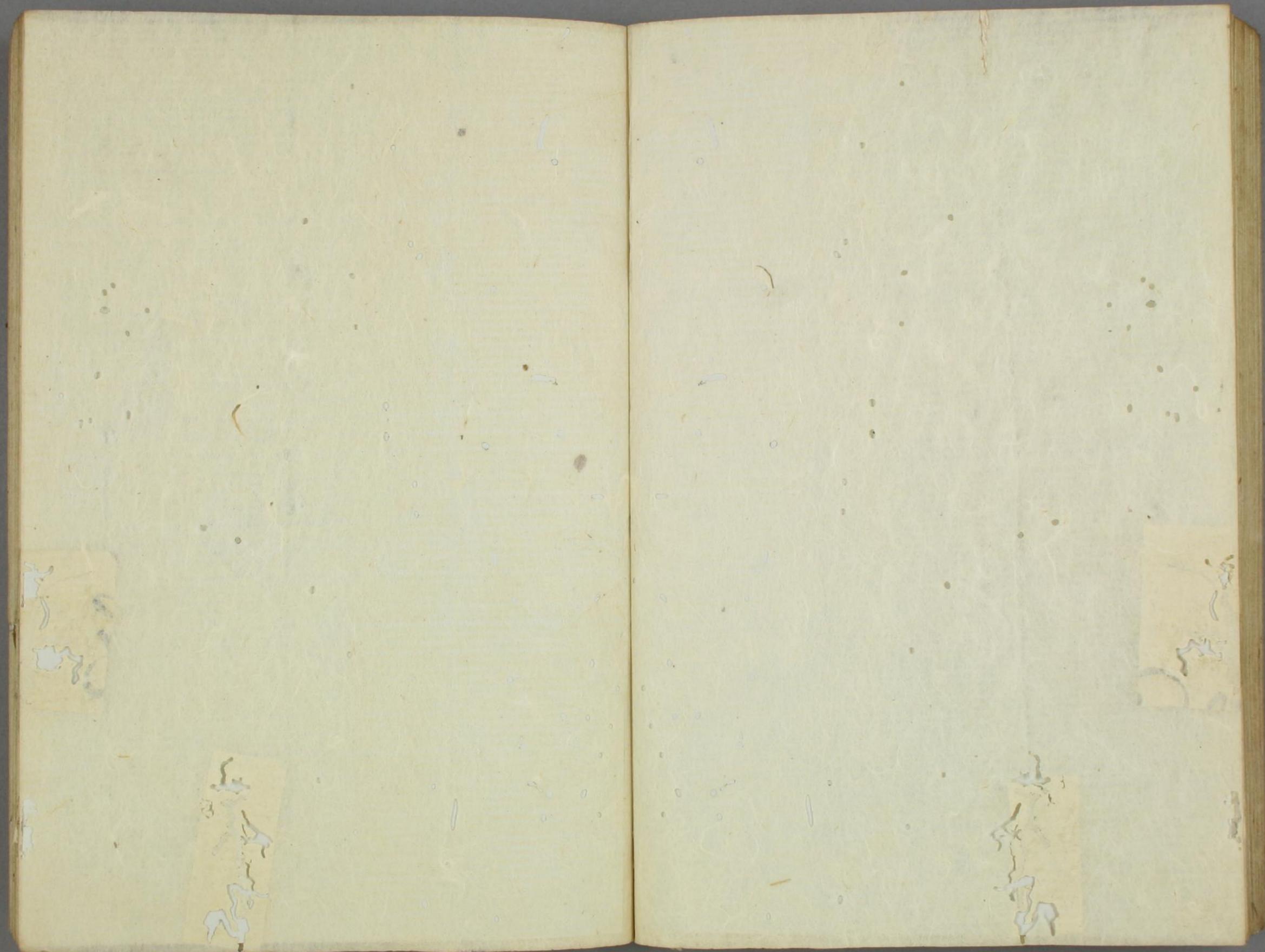
在判

授與

河原士

六月廿三日と常麻受施羅如波の日ふて則  
彼岸も小老尼の跡なる其合して不可思議  
又上人一紙も六月廿三日と辛之の二日

一あり六月といふも其の教光しつとみたり  
て又そのとてあきと六月も又六月といふも  
しとらりたり無独りも小授也のみ皆  
サ之日と記しつとらるる一と小授也のみ日  
是あきと又何れ因縁身合して貴く  
かへつとて巻く其の月日年月ひの字  
利益ありしむ世帯の格致めて漏する系  
あは



採摘

何某記之

△採りては花をおとす事也摘とはむしりて  
 木の葉をとりて種は事なりしふきをその原の  
 口決りて百の一二はまことりて此の意なり  
 但し採摘は某受者の功なりて事  
 師よりて造るゝ文を以て此者の意なり  
 しむるなり

○ 齋は南極なり

△ 南極星ハ二指ニ度地下ニ在テ日本光ニ入リ  
朔鮮ニ入リ又中ニ也南極北極ニこの極星  
地ニ人の南向スルニ足テ是ノ極ニ入リ  
仰ルアリ今ト不入事ニモ勝ルニ入リ  
のハ斗也是ノ入り未ハ八ノ入り

○ 入定時 躰與鼻相對ス

△ 今定時ニ牛ノ夢ノげニ入リテ極ニ入リ  
あり定時ニ入リ今定時ニ入リ

生感有テ一刹那ニ成六ノ刹那を積ル  
一念トイフニ成テ其微細ノ事ニ入リ  
戸壁ノ邊ニ入リ日光輝キ内ノ微塵ガ  
入リ今定時ニ入リ今定時ニ入リ  
此ノ入リテ極ニ入リ又定時ニ入リ  
今定時ニ入リ今定時ニ入リ今定時ニ入リ  
今定時ニ入リ今定時ニ入リ今定時ニ入リ  
今定時ニ入リ今定時ニ入リ今定時ニ入リ

如く場訓に撰ぶ事もしも二邊に於て  
右目之の微塵は同くして修し易く均等  
して定む之時正しくいつぬまぢの法業を  
かゝるたぢかまぢの脈と鼻と相封すとは  
禪定に修する方の他法を究むべし  
すもぢあり

○ 入定時浮沈二ツ  
其浮之時

○ 繫縁臍中可制諸乱念

○ 其沈之時

○ 繫念鼻端心住在縁中令無散意

△ 是と初心念之時心浮散して定む沈みせん  
散念のとやう浮き其ま心縁の中  
して定むる自然法念をせしむる修  
氣は老るともひかり沈のこもると浮散が  
止むるもあつて昏沈とて心言ふ沈して

眠りて或は腰をき首垂してふき流る  
等して定心法をふら其時又念及鼻の  
先中けて心法教くは鼻極ふせらふは  
鼻小執る法をといふやなり無淨院言  
禪定の物なり此病退く時定心法を  
淨を教洗と書あり字に介法の中を  
む身病を治す句に相續するは教の礼  
る法止し定心も又右不同く之を定心  
に

入平の發のすくぬるをて遠化の  
法なり

又齋下之丹田

○ 止心守文治衆病術也

△ 是れとと他法中醫學書中出有丹田と  
守るる大なる業とを深心して醫術  
あり有ても用ひず病方中を世に  
守るる大業の意なり又世信の雷の

写る將無しとまをとしヤシ書子半譯て  
其事を告るとと又直石塊の叙例者有女  
勝のたりとして一人二寸小右刀塊はし小車  
其名合りしを其子と大坂有て教るとして  
をやしを中ふ川邊を某とまて恐切あり  
をる其師死せよ及介小流し川にをを  
あらししとど川橋を建て自死後地事  
りり小首ふせあ一物しけてかきりり教是

かん秘密二大事の軸ありん祥し江表小用  
らくも心あり祥しくは流知るとのそ我あり  
かゝ時時いそ祥のぬるぬるやとして獲ふ  
句ひしとつらやして用事とる大形を信りし  
事ともしてはとめかして除後る我とて奥ふ  
梅といふ字只一つ大の書きて其根小使ふ者  
一見ふ秘訣といふと有ふふかして川邊を  
大にかたは其後子明書しは合て使ふ

今までも八指あつてはるゝ驚きやれは是の所也  
存心の内を何とせしむれば新有の事も  
梅の一字我をりしれそとせり其後高年  
或すも梅の一字を修しせしめて多人の  
中であつたの事も猶も其氣色にて利を  
ゆるる度にて終ふ家流にふりす事あり  
ありやうし今梅念佛の事も是の事  
かく梅の事あり元中ふしめて控へ

その事

誰も知る南無阿彌陀佛の事もほめてこそ  
然らずしむるの古歌に存せしむる事あり  
ゆると我流あり

止観等ニ詳ナレバ心ノ升タナレハト凡度ト  
ナカレト也ト故ニ

△ 止観を南岳の台の書凡そ本有止観の修  
行次第あり等しと其心術の事ふ

無の事寂多有縁なきものなり是もまた縁  
念佛といふも縁にて縁といふ事甚いとまある  
事少くも縁なきものなり大事のこけり事縁  
なき事ありて引のふ斗て其際縁なき  
といはれぬ彼も心のよたてて縁なきこと  
念ふ〜今此が縁の法と違ふ  
似てまこと速うなる理やと事縁具〜  
〜事やと理を具するを又本縁との

大因縁の沈沈する事捨ありと

有云〜云

○ 有漏ノ沈水東大スラ

△ 有漏とを漏れをいふて凡そ此境界を  
名をいふ沈む業因をまことあるて此界の  
内の事をいふて有漏といふなり沈水と法  
際を東大寺の香のみなり是もまた縁なき  
の香と在嚴の意香包の香つてても

を以て自の孫の爲にせしむるにけりて如きはる  
やせと口におもひも事も呼ばのまが旬ひ  
るの成るるも深遠の法にその力の及ぶと  
まよて大利をばむるの爲事とすんべ  
力成るるにせしむるにけりて  
せんといふ事ありてはるの法にけりて  
かゝるに思持ぬといふゆゑに他一のい  
したるに事ありてはるの法にけりて

丹田池ニ

○ ウロノ達泉昆明スラ等ノ

△ 丹田池ニ 撮下

右その下下も亦の二すといふも  
云はるるにけりて詳なる事と深泉の二改

云々 丹田池ニ 撮下  
云々 丹田池ニ 撮下

丹田池ニ 撮下

丹田池ニ 撮下

丹田池ニ 撮下

坤綱探掘の  
真中かちる

とて昆以泥とて是をくの大泥めく  
いある早懸やもくも思ひあやの泥也  
まると我が羽の液坊の泥振返泥色  
振返まよるちの毎界の泥うへ  
としては幾思といふ事なるのいともんや丹田  
の南無泥泥佛の泥と極糸の八功徳泥  
一羽やけして産はあもの念佛と泥泥の心水  
あるとや支の遍照も中念佛も毎方

とて小極業の纏ひてあましも氣を牙也  
と衣裏の玉我あふり

榮枯無干芥脆利率ニ安坐シテ

△ 牡丹田泥の華とてあらの枯々ののとて  
事あくし何もさあはくひの白蓮華也  
浪挽羽なると回しむる榮枯なり  
との遠る昆のさもひてんやよとて  
白を根如色さて一切をくぬのま結ん

ありて凡そ一の真無心の深き功徳あり  
とし芳純利義らふ皆その南無の深  
泡沸せり丹田此の水口一とひ小塩きあり  
細きと口と梅とに水が大向のよき塩き  
縁までまれば集すの事と云ふらふ事  
と云ふれども心も水は海の水と云ふ  
凝ひ念佛くまれてもおきしては海泡の様  
なきとあて知るとしてたんありし事

たうきんありて心と云ふをゆけとは  
力成入き也自然の道に心なきなり  
際 心して念ありふとありし事  
有り其の中は心あり事ありし事  
許となし心あり其の心なきを  
泉なりきぬもや香包や指板のきぬもや  
奥毎の念力もやたしと云ふは流授者  
中子端すなり

唯口常言病縁念佛寤寐恒一執持名号耳

△恒下とて支極ふ句と極ふとの用心なり芬

随利善妙とて茎一本也枝をみせりて空極

名とら枝縁らふてありませり又凡芥子

柳樹と枝たひみせり合とて蓮のこ比

中の川跡と枝ふなり比と異枝ゆるり

同と浪挽と極すに同と又其の令とゆて

ぬいぢいしつとすうとやとれとるまじ也

無耳の字はるるむの糸丸糸席して無耳の

字のゆりや百九十有六の字と唯無耳の字

の用合なり

△耳とてふげはのあまま(連ひ)造り場とて

と指す極とてふかも物とふありていふ

極ふぬいしや及ふ糸丸がゆしてゆらあるなり

用合とて用をよとて糸丸のあゆむなりて決百

九十六字とらりてあて一つふ合す終と耳は

一字とて南無阿彌陀佛

本文の下ふ下の字も亦多しに有る記者

くのとて平字解ふにふるの意也

右字解の字貴く入流の故也

敬語を和字に抄す事也

是所が字も亦多し唯流の志也

ふとて其流也。法の真かあせり

解ふ事と道信字を撰る一人は同志

のふ及るまの

敬虫塚題字の本

字解の所書ふこと教法の三文字有るは遺

文のその重字の教法とて教法の本據あり

度ハ波羅提末又ハ云解脱と翻しはゆ

歴縁対候ハ波羅提末又解脱教すこととて

皆解脱せり同經の世間の縛着を没底苦  
の縛を以て代して取のこゝに棄ての端小縛  
脱の二縛を以て取のこゝに棄ての端小縛  
を以て代して取のこゝに棄ての端小縛  
外道して世を以て取のこゝに棄ての端小縛  
齊法の縛を以て取のこゝに棄ての端小縛  
願成りて取のこゝに棄ての端小縛  
用其心善教一法以て貫て又結縛の縛を

經小波羅提亦又遺教亦同中事究竟  
唯今世文成書亦小隨て波羅提亦又  
以教せしむるの意を以て孔門の十目以て  
生ふて用して末後小薄氷の治向の神の夫令  
之因了回教の二字亦一貫す出とて出戒  
小沙門の家と傳ふるを以て捨ててはあらず  
又垢を以て見よ又あらず捨ててはあらず  
世の善悪を以て求むるを以て其水成又海叢

のつらき肉眼の見るまの細生或本のみみ教  
房す微細ふ公死りして其法余が損すぬ振を  
るり教の字佛法寂事むらり又法を活佛あり  
不淨具定有をぬむの心せひも定有を  
起位ふ齋齋中の廣くと凡更のんく不淨齋中  
の細き及細生の廣くと其落のんり不淨細生  
の細と佛眼のま其意事理ふりきと法は  
字ふしけてえくたといふ其意事不淨の意

ありて右の意微細ふ自も他も有縁の心は  
濁その居ゆ心はして捨くたふ大ふ出念を  
捨するらり聞ふしてと増生の苦之成業して  
たふ其を津めてこるらり躰風らり其なり  
そのまも其まもて其事とわらり力有るを其物  
まんと湯ありする事佛きとて出らるらり  
物色とては能らあひしに教ふたふの差  
け買ふ水ははる其なりとてなると

入角のことごとく又々しく一場は流する飛凡  
呂の場ゆき日流せ貝の歌吟も角にひびけ  
るくちあゝあめて痛首くく不問ゆる目法  
ずり事ありあつて不控の志あつてよめよ  
すふる万あのみまの活佛此の人かんそに接履履  
の異れと憐れまらんや人面高心きくくや  
心配り幕なるれむ佛様の目ふくくくえぬの  
貝れ食也の六毎日持衣のくくくも後細ふ

むてと把罷殺多あかん運中の中用扱むき  
有ぬまやりの距離の柳あゆみのかもよきくふ  
あるよのちら水流はん持るかも出のくくく  
扱ふ下かろく扱ふとくかろくもかろせ  
まを食扱ふ施取するくくくあきとも細原の  
殺業と成事とあゝ無ぢらり幕ふ入細め入  
貝眼あつてかろくあひひまの大成経の費の  
郊の濁すの字なる今のたどくかんくく

業の後まゝいゝとていふ事のもゝ事な悔  
すゝせしひよお母起信お席を凡とたて  
度乳を乳を罷ふゝこそ又度乳の合らて  
アゝ思とあるこの所は是も縁今よりと老り  
者ありゝゝハヤあゝいひ又武士も皆後  
と弁ふゝ無名はうゝけととと中いひ又  
痛てわりのとをゝてたゝハヤせゝもと  
ぐゝるの貝たゝと食ゝとの生合ふゆゝ

心成能く事やと保虫のゝゝハヤ又  
粒をまゝ終朝の乳を保虫をてゝ人の着る  
ありゝ成りゝゝの或を強虫のて中  
ゝと虫のまゝ有結成すゝて具するがゝ  
和別ゝゝとせぬがゝゝゝとせむす  
まゝゝやみゝゝとせむすゝゝの  
きゝゝや所感時の教虫派遊有ゝゝ何  
唯後之礼の題年のもありゝのゝ

此教書の二文字のこゝ貴きこと

今度從了貞居士慶轉願  
惠借滌髮之祀為増進護  
奉書寫者也

享保中一丙辰舊正月廿二日 高壽

再州衣山宗惠  
後改如上禪師御真本以奉披合畢

高壽寺にありし

もあつたに  
開縁の時

第也者うきへス白  
心成力也一也  
つ出々々々々々々々  
海原由糸月十  
者亦又由由一也  
可也戸小了  
分士と入  
之様小一也

歌々中序

又出る之と奥へ

書子の作一也

多と白く其の

下之書し

夢の作一と書

海に一葉の如く

招小母のひか

平走毛 殿 根

心 ありか ぶ ぬ ぬ

何 小 七 じ じ 七

一 本 々 々 々 々 々

中 下 強 横 出 入 々

栗 栗 栗 栗 栗 栗

流 流 流 流 流 流

し 志 色 毛 湯 古

鳥の行先はもの  
時しは生あ  
し大幸河  
るしは比備ふ  
絶るむはの地  
毒の旬有年  
性一はつこと  
しの子はちの

二  
リ  
し  
と  
す

光  
代

南  
無  
阿  
彌  
陀  
佛  
一  
書  
元  
四

右 淨土寺 寺園書 寺簿字のしとく

享保廿一丙辰曆 育政元 己月十六日了貞居士

同系物書紙の巻子何 羊心抄が中巻と 四

了貞士と寺外題の書紙川端記に記す

別濟寺と澤ありして上のしとくあり

寺ありて是は寺名大慶寺ありて寺あり

と云ふ事あり

且のしとくは是の記にありて其書を其し





5

1

印

印  
也小

